

不回向から如来回向への展開 ― 深心を中心として ―

杉 浦 道 雄

はじめに

法然は不回向について、『選択本願念仏集』（以下『選択集』）「二行章」に

第四不回向回向対者修正助二行者縦令別不用回向自然成往生業^①

と、五番相対をもつて明かす。念仏一行は、善導が開顯されたように「仏の本願に順ずるが故に」衆生回向の行ではなく、衆生不回向の行である。しかし、衆生不回向の行であっても行を修するのは罪惡深重の凡夫であり多くの問題を抱える。即ち、凡夫であるが故に本願を疑う心が生じ、自力念仏や雑行へと陥ってしまう点である。法然門下における一念・多念の論争などは、信を輕視した結果である。

このような論争が起こる中、親鸞は不回向について如来回向という領解をされた。不回向と如来回向は同義でありながらも、そこには信の課題に深く踏み込んだ内面的構造が見られる。

本稿においては、不回向を開顯された法然における深心を中心とした三心觀について考察をし、親鸞が信の内

省においてどのように展開されたかについて考察を試みることにする。

一、三心釈

『仏説観無量寿經』(以下『観經』)散善段上品に

若有衆生願生彼国者發三種心即便往生何等為三一者至誠心二者深心三者回向發願心具三心者必生彼国^②

と、至誠心・深心・回向發願心の三心は往生の正因であることを明かす。この三心の説かれる處は上品であるがこれについて善導は「散善義」に

又此三心亦通攝定善之義應知^③

といわれるように、九品に通じ、さらに定善の機にも通ずとする。

今ここでは善導に於ける深心釈について窺うこととする。善導は「散善義」上品上生釈において深心釈を明かす。まず深心について

二者深心言深心者即是深信之心也^④

と、深心について「深く信じる心」であると定義付ける。次に深信について二種あるとし、

亦有二種一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流

転無有出離之縁^⑤

と機の深信について明かし、次に

二者決定深信彼阿彌陀仏四十八願摂受衆生無疑無慮乘彼願力定

得往生⁽⁶⁾

と法の深信について明かし、二種深信を明かす。二種深信以下、総じて七深信を明かす。これを『愚禿鈔』に依れば、二種深信以下の五深信は次の通りである。

第三決定深信『観経』

第四決定深信『彌陀経』

第五唯信佛語決定依行

第六依此経深信

第七又深心深信者決定建立自力⁽⁷⁾

善導の深心釈に於ける特徴は、天台が深心を以て仏果を求める心、即ち菩提心と解釈するのに対し、三心の深心について深信の心と解釈をし、定散諸機に通ずるものであるとした。ここで言われる深信は浅信に対する言葉であり、疑いなく信ずることである。本願に対する疑う心について就人立信釈に

一心専念彌陀名號定得往生必無疑也⁽⁸⁾

と明かす。この善導に依って明かされるところの疑いをもつ心が、法然の深心観に深く影響しているものである。

善導の功績は、純正なる浄土教の確立である。純正浄土教とは、『観経』が末法の惡逆の機に向かつて説かれた経であることが開顯されることを根拠とする。即ち韋提希について、浄影寺慧遠や天台山智顗が唱えるような大

不回向から如来回向への展開 — 深心を中心として —

権の聖者ではなく、韋提希が凡夫であることを明らかにすることで經の持つ意味が大きく異なってくる。韋提希が凡夫であることは、同時に本願を疑う心を持ち合わせているということであり、深心が課題となるものである。

二、法然の深心観

善導は深心について、『觀經疏』散善義と『往生礼讃』前序に明かすものである。法然の深心の引用について語録を見れば、『選択集』『往生大要集』は『觀經疏』と『往生礼讃』から引用し、『三部經大意』は『觀經疏』からの文のみを引用している。様々な引用法があるが、法然の深心における引用の意は、深心を就人立信釈と就行立信釈で明かす『觀經疏』が中心である。

法然は『三部經大意』に

要ヲ取り詮ヲ選テ是ヲイヘハ、深心ヲサマレリ。^⑨

と、三心は深心に収まることを明かす。また『選択集』「三心章」に三心について善導の三心釈を引用し、その私釈の中深心について

次深心者謂深信之心當知生死之家以疑為所止涅槃之城以信為能入故今建立二種信心決定九品往生者也又此中言一切別解・別行・異學・異見等者是指聖道門解行學見也其餘即是淨土門意在文可見明知善導之意亦不出此二門也^⑩

と釈す。ここで法然は、信疑の得失を明かす。即ち、本願を信ずるということは疑わないということであると強

調するものである。この信疑の得失については、特に消息・問答において多く述べられる。「大胡の太郎実秀へつかわすお返事」には

称名念仏ノ人ハ決定シテ往生スト信シテ乃至一念モウタカフ事ナキヲ深心ト也。シカルニモロモロノ往生ヲネカフ人モ本願ノ名号オハタモチナカラ、ナホ内ニ妄念ノオコルニモオソレ、外ニ余善ノ少ナキニヨリテ、ヒトヘニワカミヲカロミテ往生ヲ不定ニオモフハ、ステニ仏ノ本願ヲウタカウナリ。¹¹

と述べる。善導が『観経疏』において、「深く信ずる心」とした深心について、法然は積極的に就人立信釈に言われる「疑う心がないこと」を強調する。本願を疑う心として、法然は名号を称えながらも善行が少ないことを理由に我が身を軽んじていることを挙げる。即ち、如来により選択された称名念仏一行であるにも関わらず、雑行を修することでは我が身の往生を確認しようとするものである。しかし、これは疑う心が起こすものであると促すものである。この疑心に、機の課題が浮き彫りとなっている。

如来選択による念仏一行は、法然が不回向回対で明かすように不回向の行である。しかし、善導の開顯された純正浄土教の救済対象が、罪惡深重の凡夫であり、その凡夫に相應した行として念仏一行が不回向の行として明かされるが、救済対象が罪惡深重の凡夫であるが故に本願に対する疑心が常に付きまとう。その為、法然は「御消息」において

一とたひも、この念仏往生の法門をききひらきて、信をおこしてんのちは、いかなる人、とかく申とも、なかうたかふ心あるへからすところおほへ候へ。これを深心と申候也¹²

と、一度念仏往生の教えを聞き、往生すると信じた後は、どのような人が何を言っても疑う心を起こしてはならないと述べる。即ち、往生すると信じた後も疑う心が沸き起こることを注意しなければならないと促すものである。本願を疑い、不回向の念仏一行を疑うということである。その先には、法然の念仏を歪曲化してしまう可能性を孕むものである。法然門下に於ける一念多念の議論も、この延長線上のものである。

また、本願を疑う心によつて念仏が喜べないにも関わらず、それを罪の重さと誤解し、善行を積むことによつて罪を軽くすることへの歪曲化も指摘している。これについて法然は『御消息』に『観経疏』『散善義』の二種深信を引用した後、

ま事にかくたにも釋し給はさしかは、われらか往生は不定にそおほへましと、あやうくおほへ候て、されはこの義を心えわかぬ人やらん、わか心のわろければ往生はかなはしなんとこそは、申あひて候めれ。そのうたかひの、やかて往生せぬ心にて候けるものを、たゝ心のよきわろきをも返り見す、罪のかるきおもきをも沙汰せず、心に往生せんとおもひて、口に南無阿弥陀仏となへは、声につきて決定往生のおもひをなすへし。①
と、二種深信について述べる。善導の二種深信の注釈が無ければ、我々の往生は定まらず不安であるとし、本願を疑う心こそが往生出来ない心であると述べる。さらに、罪の軽重は問題ではなく、ただ信心によつてのみ往生が定まると明かすものである。

ここでの信疑の得失論は、常に行の相對と同時に論じられる。即ち、本願を疑うことは、善行を求めることであり、それは念仏と雜行の相對論に基づくものである。これは、常に「行々相對」に努めてきた法然の特徴でも

ある。しかし、親鸞における信疑の得失論は、行の相對に留まらず、信の問題へと進んでいる。

二、親鸞の深心観

法然門下の信心論を窺えば、その多くが『観經』の三心論である。聖覺の『唯信鈔』・隆寛『後世物語聞書』・証空『自筆鈔』『他筆鈔』・弁長『末代念仏授手印』などがその代表である。今ここで、聖覺『唯信鈔』の三心観について窺うこととする。

法然と聖覺の關係を『選択集』と『唯信鈔』の關係に見れば、その構成や『選択集』の真意を開顯するという『唯信鈔』の存在意味からも、聖覺の法然への深い傾倒は明らかであり、先学により指摘されるところである。また、親鸞においては『唯信鈔文意』を顯し、『唯信鈔』における第十七願意の開顯の影響を考慮すれば、聖覺の存在がいかに重要であつたかも同時に指摘されている。¹⁴

『唯信鈔』の三心観を窺えば、三心を深心でおさえており、回向発願心については殆ど述べていない。三心について明かす前に、行の選択について明かすが、その最後に

上根のものは、よもすがら、ひぐらし、念仏もうすべし。なにのいとまにか、余仏を念ぜん。ふかくこれをおもうべし、みだりがわしくうたがうべからず。¹⁵

と、念仏をもうすことについて疑う心をもつことを否定している。ここにも聖覺の三心における深心観が明らかである。また深心について

ふたつに深心というは、信心なり。まず信心の相をしるべし。信心というは、ふかく人のことばをたのみて、うたがわざるなり。⁽¹⁶⁾

と、深心釈においても疑う心を否定している。このように聖覚の三心観は、法然の『三部経大意』に近く、深心を中心とするものである。

次に親鸞の深心観について考察をする。『愚禿鈔』下に深信について

今斯深信者他力至極之金剛心、一乘无上之眞實信海也⁽¹⁷⁾

と、他力至極の金剛心であると讃えられている。親鸞が善導・法然の深心を受け、これほどまでに絶賛されるには信の内省が根本にある。即ち、法然門下においては、法然の「行々相對」による選択を受けて、行を中心とし信を軽くする多念思想や、逆に信を中心として行を軽くする一念思想が起り、論争となった。この中、親鸞は法然の選択思想の真意を開顯する為に、行について法、信について機として見ていかれた。ここに機法の二種深信が課題となるものである。

まず、親鸞における三心の領解についてであるが、法然と親鸞ではここに展開が見られる。法然においては二経の三心を区別していない。これについて法然は『良忠上人伝聞の御詞』に

上人云、本願至心信樂欲生我國觀經三心小經一心皆三心也⁽¹⁸⁾

と言われる。法然は二経の三心を区別しないが、親鸞は区別をしていく。親鸞は『唯信鈔文意』に

『觀經』の三心は定散諸機の心なり、定散二善を廻して『大經』の三信をえむとねがふ方便の深心と至誠心と

しるべし⁽¹⁹⁾

と明かし、浄土和讃においては

定散諸機各別の自力の三心ひるかへし 如来利他の信心に通入せむとねかふへし⁽²⁰⁾

と讃える。これについて「化巻」の御自釈において隠顕により二経の関係を明かす。まず

問う『大本』三心與『觀經』三心一異云何⁽²¹⁾

と、『大經』に説かれる至心・信樂・欲生の三心と、『觀經』に説かれる至誠心・深心・回向發願心の三心の関係について、同意であるか異なる三心であるかを問う。これに対し

答釋家之意按『无量壽佛觀經』者有顯彰隱蜜義顯者即顯定散諸善開三輩三心然二善三福非報土真因諸機三心自利各別而非利他一心如来異方便忻慕淨土是此經之意即是顯義也⁽²²⁾

と顕の義を明かす。ここに明かされる『觀經』の顕の義は、行のうえでは諸善が説かれ、機の上では三輩それぞれがおこす三心、即ち自力の三心を明かすものである。

次に彰について

言彰義彰如来弘願演暢利他通入一心縁達多闍世惡逆彰釋迦微笑素懷因韋提別選正意開闡彌陀大悲本願斯乃此經隱彰義也⁽²³⁾

と彰を明かす。『觀經』も『大經』と同じように阿弥陀如来の弘願念仏を明かすものであることが明かされる。

この隠顕釈に大きく影響を与えたのが、善導の三心釈である。即ち、顕の義に説かれるように定散諸機の行修

不回向から如来回向への展開——深心を中心として——

は凡夫の罪障の深重なることを自覺せしめることとなり、そこに機の深信が生じる。さらに就人立信が就行立信に極まるが如く、機の深信は法の深信を離れることはない。このように、三心釈によって、行の廢立による從仮入真の立場を明らかにし、さらに信の内省により隱顯の義を明らかにされたのである。

罪業深重の凡夫が自力無効であることを自覺するには、『觀經』において救済の対象として説かれる韋提希の立場が重要である。法然は『選択集』において八選択を立てる。八選択は、『大經』について三選択、『觀經』について三選択、『阿弥陀經』について一選択、『般舟三昧經』について一選択を立て、淨土三經がみな念仏を宗到となすことを明かす。これについて親鸞は『愚禿鈔』に十六選択を立て独自の見解を明かす。十六選択は、『大經』について選択三種とし、法藏菩薩について四選択、世饒王仏について四選択、釈迦如来について一選択を立て、『觀經』について選択二種とし、釈迦如来について五選択を立て、韋提夫人について二選択を立てる。この中、注目すべきは法然においては立てられていない韋提希について「選択淨土」と「選択淨土機」の二選択を挙げる点である。ここに韋提希について二選択を立てた意を窺えば、仏の願心が、罪惡深重の凡夫である全ての機を攝取するということを開顯するものである。法然において不回向として開顯された念仏一行が、行の相对から信の内実へとその課題が展開された時、韋提希に代表されるような罪惡深重の凡夫が自力回向の限界を自覺し、弘願へと転入する如来回向を開顯されたものである。

四、從仮入眞

法然における罪惡深重の凡夫の救済が、親鸞においてさらに信の内実の課題として明確になってくるが、法然・親鸞において大きな課題となるのは、聖道門を離れ浄土往生の道に入ったとしても、罪惡深重の凡夫であるが故に自力回向の行への執着と本願への疑心から離れることは難しく、定散二善の諸行や形は念仏であっても自力の心から離れることが難しいことである。この課題について親鸞が法然の不回向を直ぐに領解されたかといえ、注意深く窺わなければならない。

「化巻」に、第十九願を以て要門とし、第二十願を以て眞門と明かす。即ち、要門は諸行往生であり、眞門は自力称名の往生である。眞門は行体においては弘願念仏と同じであるが、能修の心について自力他力を立てるとき、眞門の機が明らかとなる。

要門は人間の罪惡深重の凡夫性を自覺せしむることに於いて機の深信が生じ、法の深信と離れず弘願に転入せしむるものである。法然においては徹底した行々相對において明かすが、親鸞においては要・眞・弘の三門を立て信の内省による弘願門への転入と領解されていく。

要門について親鸞は御自釈において

依此按方便之願有假有眞亦有行有信願者即是臨終現前之願也²⁴

と明かす。臨終現前の願とされることから、第十九願についてであり、第十九願に仮と眞があると明かす。そし

不回向から如来回向への展開 — 深心を中心として —

て、第十九願の行は定散二善の行である。そして信については、至心・発願・欲生の自力の信である。その上で依此願之行信顯開淨土之要門方便權假⁽²⁵⁾

とし、弘願真実へ入るための入り口の門を開く。『觀經』の方便を明かし、真実が説かれていることも併せて明かす。それは『愚禿鈔』において深信を

今斯深信者他力至極之金剛心、一乘无上之眞實信海也。⁽²⁶⁾
と讃える如く、

亦此『經』有眞實斯乃開金剛眞心欲顯攝取不捨⁽²⁷⁾
と明かす。さらに深信について

是以『大經』言信樂如來誓願无雜故言信也『觀經』說深心對諸機淺信故言深也⁽²⁸⁾

と深心について信樂とし、疑蓋が雜わることがないことを根拠に信を開顯する。これについて三願転入に、親鸞の信仰体験によって語られるところである。

是以愚禿釋鸞仰論主解義依宗師勸化久出萬行諸善之假門永離雙樹林下之往生回入善本德本眞門發難思往生之心然今特出方便眞門轉入選擇願海速離難思往生心欲遂難思議往生果遂之誓良有由哉爰久入願海深知佛恩爲報謝至德撫眞宗簡要恒常稱念不可思議德海彌喜愛斯特頂戴斯也⁽²⁹⁾

この三願転入は多くの問題を抱えており、先学においても多説あるが、今ここでは詳細を窺うことは避ける。重要なのは、要門から真門へ、真門から弘願への転入過程が、親鸞の宗教体験としてその内実が示されているこ

とである。即ち、親鸞の内面において自覚された従仮入真の過程である。

法然において往生の正定の業因として念仏一行が明かされたが、行々相對に徹している為に内面的自覚においては、深心を中心としながら本願に対する疑心への警告が中心である。親鸞は、法然の選択本願の念仏について行の相對から信の内省へと展開することにより、回向と相對的に立てられる不回向から、絶對判としての如来回向として弘願門への転入を開顯するものである。

結論

法然が開顯された不回向について、親鸞が如来回向と開顯された過程について、深心の課題を通して考察を試みた。

法然の選択思想は、常に「行々相對」で明かされ、その相對の中心は不回向回向對である。しかし、仏の本願に順ずる行が不回向であることが開顯されても、その念仏一行を行ずるのは罪惡深重の凡夫であるが故に多くの課題を抱える。

善導は深心について「深く信じる心」とし、所信の内容から二種深信・七深信を明かす。法然は善導の三心觀に基づき、『大經』と『觀經』の三心を區別せずに、深心を中心に明かす。その中、念仏一行が不回向の行でありながらも、行を修める機が罪惡深重の凡夫であるが故に回向行である雜行に迷うことを注意し、善導の明かす本願に対する疑心を特に強く往生困難な原因として示すものである。しかし、法然の選択念仏は弟子の間において

論争が起ることとなる。

このような論争が起る中、親鸞は法然の「行々相對」から、信の内省へと展開することとなる。即ち、法然においては本願の三信と『觀經』の三心が區別されることなく同一視されていた。しかし、親鸞においては、善導の三心釈に基づき隱顯釈を明かし、自力無効であることの自覺を促すことにより、善にたのむこともなく、悪をおそれることもない、他力至極の金剛心へ転入せしめることとなる。

法然においては、機の疑いは雜行に頼る心であり「行々相對」の立場からすれば許されるものではなく、厳しく注意を促していく。不回向の立場からすれば当然であるが、救われる機はどこまでも疑心がまじわる可能性を孕む存在である。親鸞は、不回向について疑心を弘願門への転入の契機とした。即ち、「化巻」において果遂の誓いが開顯されたことは、不回向と如来回向が同義でありながらも、念仏不回向が抱える本願への疑心の課題を、必ず報土往生を果たし遂げさせる本願としてここに開顯されたことにより、如来回向の絶対的救済過程が具体的かつ明瞭になったのである。

註

- (1) 『真宗聖教全書』第一卷 九三七頁
- (2) 『真宗聖教全書』第一卷 六〇頁
- (3) 『真宗聖教全書』第一卷 五四一頁
- (4) 『真宗聖教全書』第一卷 五三四頁

- (5) 『真宗聖教全書』第一卷 五三四頁
- (6) 『真宗聖教全書』第一卷 五三四頁
- (7) 『定本 親鸞聖人全集』第二卷 二七頁
- (8) 『真宗聖教全書』第一卷 五三七頁
- (9) 『昭和新修 法然上人全集』三三頁
- (10) 『真宗聖教全書』第一卷 九六七頁
- (11) 『昭和新修 法然上人全集』五一六頁
- (12) 『昭和新修 法然上人全集』五八三頁
- (13) 『昭和新修 法然上人全集』五八〇頁
- (14) 『唯信鈔文意』講讀 ―選択と唯信― 田代俊孝著を参照とした
- (15) 『定本 親鸞聖人全集』第六卷 五三頁
- (16) 『定本 親鸞聖人全集』第六卷 五四頁
- (17) 『真宗聖教全書』第二卷 四六七頁
- (18) 『昭和新修 法然上人全集』七六二頁
- (19) 『定本 親鸞聖人全集』第三卷 一七八頁
- (20) 『定本 親鸞聖人全集』第二卷 五〇頁
- (21) 『定本 親鸞聖人全集』第一卷 二七六頁
- (22) 『定本 親鸞聖人全集』第一卷 二七六頁
- (23) 『定本 親鸞聖人全集』第一卷 二七六頁
- (24) 『定本 親鸞聖人全集』第一卷 二八七頁
- (25) 『定本 親鸞聖人全集』第一卷 二七六頁
- (26) 『定本 親鸞聖人全集』第二卷 二六頁
- (27) 『定本 親鸞聖人全集』第一卷 二八八頁
- (28) 『定本 親鸞聖人全集』第一卷 二八九頁

不returnから如來returnへの展開 ―深心を中心として―

(29) 『定本 親鸞聖人全集』 第一卷 三〇九頁